

図画工作科における「わたしの学習」

自分らしいよさや可能性を発揮し、作り出す喜びを味わう子を育てる
～「もっと…」「次は…」－子どもの表現意欲が高まる図工科学習～

1 図画工作科学習がめざすもの

子どもは、自分の思いや願いを絵にしたり、形に表したりする人としての根源的な表現の欲求をもっている。この欲求を満足させ、表現の喜びを味わうようにすることが図画工作科の重要なねらいの一つである。子どもは、題材からイメージしたことや、材料の形や色等の特徴から思いをついたことをもとに次から次へと活動を続け、自分の思いを表し、可能性を試し、ものなどの存在の感じを楽しむ。このような活動を通して、子どもは、形や色の感じやその組み合わせに気づき、思いにあった表し方を見つけ、自分らしさをはぐくんでいると言える。自ら形や色、表し方などを作り出す喜びを味わうことは児童の心身の調和的な発達を促すために大切なことである。

2 図画工作科学習における「わたしの学習」

図画工作科の「わたしの学習」とは、子どもが思いをもって活動を進めており、その子のものの感じ方やその子の対象へのアプローチの仕方があらわれてくる学習であると考えられる。

名画を模写してその中に自分が入ってみたり、絵に合った音声を入れてみたりする授業がある。名画を初めから「すばらしいもの」として見るのではなく、自分の感じや考えで「みる」ことを大切にしたい学習である。ここで言う「みる」は、視覚的に見るだけでなく、体全体の感覚を働かせて「みる」ことを指している。この学習の中で子どもは、自分なりのやり方で作品を感じ、作品を味わう。そして、作品そのもののよさにも気づいていく。この例のように、自分なりの見方や楽しみ方を見つけることの心地よさを味わった子どもは、題材と出会ったときに、どんどん自分なりの対象へのかかわり方をしようとし始める。このような学習を繰り返すことにより、その子らしい対象へのアプローチの仕方が具体的な姿として見えてくるだろう。

図画工作科の学習をとおして見えてくる子どもの姿（その子なりのものごとの見方や楽しみ方、その子なりを対象へのアプローチの仕方）は、図画工作科だけではなく学校で行うすべての学習にあらわれてくるものと考えられる。「その子らしさ」と言ってもいいものかもしれない。

「わたしの学習」を成立させるためには、その子の思いが生まれるような題材を設定すること、その子の思いや活動の表れをみとることが大切になる。また、子ども自身が、自分が今どのような活動をしているのかを確かめられる学習計画の工夫も必要になってくる。

3 題材設定のポイント

図画工作科の「わたしの学習」では、子どもが思いをもって自由にもものや人とのかかわり、一人一人のよさや可能性を生かし、自分の思いや願いを表せる題材をどう設定するかが大切なポイントになる。

題材設定の時には次のような点に留意したい。

- ・子どもにとって魅力的な色や形，材料を扱った題材である
- ・表現の手応えが実感できる「できごと」が設定されている
- ・自分の表現が選択できる学習課程が設定されている
- ・将来的にこの造形経験がどう生きてくるかという系統的な視野を指導者がもっている

また，カリキュラムを組むときには，色や形にかかわった学習の中でも，子どもが自由に感覚をひろげて思いのままに表現できる題材と，子どもが感覚を研ぎすまして自分なりの表現を見つけたり生み出したりする題材の両方を組み合わせるようにしたい。そうすることにより，子どもの表現にひろがりや深まりが生まれ，その子らしいよさや可能性を発揮する素地ができると考える。

4 「つくる」のではなく「つくりだす」喜びを

子どもは，たくさんの木切れを見ると，並べたり組み合わせたり何かに見立てたりする。また，紙を手にすると，何かをかいいたり折ったり丸めたりする。1Aの子どもたちは，入学当初から，教室に置いてある材料箱の材料を自由に使って，造形活動を楽しんでいる。このように，「つくる」ことを楽しむ傾向は生活のいろいろな場面で見られる。しかし，「つくりだす」喜びは，対象とかかわる中で表現の手応えを感じ，それで得たエネルギーをもとにさらに対象とかかわり，試行錯誤しながら自分の思いやイメージに近づいた時に初めて味わえるものである。

子どもが「つくりだす」喜びを味わえるようにするためには，自分の活動の手応えを感じられる場面を学習の中で用意していかなければならない。活動の手応えを感じた子どもは「もっとこうしたい」「次はこんなことを」という新たな思いをもつ。子どもの表現意欲の高まりが見られる場面である。表現意欲の高まりとは，①意欲が持続すること②表現欲求がより具体的になることであると考えられる。

表現意欲を高めるためには，学習計画を工夫することと効果的なコミュニケーションの場を設定することが必要である。

(1) 学習計画の工夫

子どもの中では，活動は止まって見えても意欲は持続していることがある。「もっと〇〇したい」という気持ちは活動時間の終わりに最も強まることが多い。この意欲を次の時間へどうつなげるかが大切である。

昨年度の2年生の題材「おたからざいりょうばこ」では，朝の会の15分を“材料をみる時間”として毎日帯でとった。15分という時間は，何かを作りかけるのでないとしたら結構長い時間である。子どもたちは毎日じっくり材料とかかわる時間をもつことにより，材料に実際に触れて楽しむ中でモノの特徴やよさを体感することができる。この毎日の15分では，材料や友達とのコミュニケーションを最も大切にした。その結果この時間は，子どもたちが材料に触れるだけでなく，「今度はこうしよう」という次の活動への意欲や思いを生み出す時間となった。実際の子どもの活動時間は，今朝の15分から次の朝の15分までの間にある。子どもたちは，休憩時間に落ち葉や石を拾い集めにまわったり，家で食べたお菓子の包み紙やカップをどんどん集めてきたりするようにな

っていった。また、教師側からみても、子どもの日々の変化がみとりやすく、その子のしたいことの支援につなげられたのが良かったと言える。朝の1モジュールは、中・高学年では、用具の使い方や技術を楽しく学ぶ時間として使うことも可能である。

このように、題材のねらいや子どもの思いに合わせて、子どもが表現の手応えを感じられるように学習計画を工夫したい。こうして得た表現の手応えは次の活動へのエネルギーを生み出す。そして、「もっとしたい」が「もっとこうしたい」「次はこんなことを」という具体的な思いになり、表現意欲が高まるのである。

(2) 造形活動におけるコミュニケーション

活動の中で、自分のやり方や考え方を構築したり、イメージをひろげたり、意欲的に活動したりするためには、周りとのコミュニケーションが大切になってくる。周りとのコミュニケーションがあるから、自分の思いがはっきりしてきたり表現することの手応えを感じたりすることができるのである。互いの見方や感じ方の違いを認め合い、互いのよさを取り入れていくことは、その後の活動のひろがりへとつながっていく。

造形活動をしているときの子どもたちは、自然な形でコミュニケーションを取り合っているが、題材のねらいや子どもの活動の様子によって、意図的にコミュニケーションの場を設定していきたい。

また、ものや人やことをつながりやを基盤においた学習では、自分の思い描いたイメージを「いかにして」「だれに向かって」発信していけばいいのかを明確にすることで、イメージを受信する側とのかかわりを意識した表現ができるのである。

(3) その子の思いや活動のみとり

子どもが対象とかかわっている時に、その子の“感じ”や“思い”があらわれてくるような学習では、一人一人のみとりが大切になってくる。その子の“感じ”や“思い”をみとることは、適切な支援ができるかどうかにつながり、子どもの意欲の高まりにも影響する。

子どもをみとる具体的な手だてとしては、

- ・ 学習中の活動のあらわれを記録すること（板書、ビデオなど）
- ・ 学習カードを効果的に活用すること

を考えている。

活動のあらわれを記録することは、その子が問題にぶつかったときの解決法の一つとして有効ではないかと考えている。子どもの活動を板書することで、子どもは、自分が今していることはどういうことなのかを知り、友達の活動にも目を向けることができる。ビデオやデジカメを使う場合は、子どもが自分の活動をすぐに見ることができるように設定しておくなど、題材のねらいや子どもの目的に応じた利用の仕方を考えていきたい。

学習カードは、「楽しめた度」をベースにし、低学年のうちから自己評価ができるように形式と使い方を工夫したい。題材によっては鑑賞に重点を置くことも必要だろう。

指導者側から見ても、このように子どもの学びの足跡を記録しておくことは、その場であらわれなかった子どもの考えを知り、次の学習につなげていくための材料になるので大切にしていきたい。